

## お歳暮の今昔

師走の声を聞くと、「歳暮」の文字が躍ります。歳暮は、日本の贈答習慣のなかでもとくに重要視されていて、季語にもなっているほどです。

虚礼廃止などといっても、そう簡単になくなるものではないでしょう。コロナ禍にあっても、さほどには変わりません。そのころで、日本の文化として根づいている、といえるでしょう。

ただし、その時期がずいぶんと早まってきました。かつては、正月の「事はじめ」を終えてからが歳暮期でした。正月の事はじめは、煤払いに象徴され、一二月中旬。したがって、歳暮は正月の前段行事でもあったのです。

歳暮の習慣は、まず江戸中ごろに武家社会にはじまり、それが町人社会に拡大した、とみまます。たとえば、菊地貴一郎『江戸府内絵本風俗往来』には、「歳の尾の賀」として、「君

主主従の間にこの札あり。(中略)弟子たる者、師と仰ぐ人の許に至り式札を述べ」とありま  
す。そして、さらに、「工商は御出入り御得意  
へ歳暮の贈物をなす」とし、その品として、  
奉書・美濃紙・水引・鬢びんつけ付油・塩引鮭・数の  
子・醤油・油などの名がみえます。  
歳暮は、新年を迎えるにあたって、日ごろ  
とりたててくれていた人に謝意を伝えるもの。  
今日もそうであるように、もとより社縁的な  
贈答習慣なのです。  
ここで重要視されているのは、まずは保存  
性。生なまもの物や菓子類は見当りません。冷蔵保  
存の技術が未発達な時代にあつては、当然の  
ことでしょう。一方で、今日の歳暮の定番と  
なっている鮭や数の子、醤油や油などは、す  
でにこの時代から人気のあつたことがうかが  
えます。  
酒は、江戸時代においては贈る側の品目に  
ありません。それは、殿中儀礼に従つてのこ  
とでした。大名たちが江戸城に登城しての「歳

の尾の賀」。そこでは、将軍が酒肴をもつても  
てなし、灘の生一本を下すのが定例でした。  
町人社会においても、それに準じるかたちで、  
酒は主人側が答礼として贈るのが習慣となっ  
ていました。

酒、あるいは酒肴だけではありません。主  
人側は、相応の祝儀も用意しなくてはなりま  
せん。これをもって、「倍返し」。現代も一部  
の主従社会に伝わる「餅代」は、この伝統か  
らなるものです。